

月例会ダイジェスト【113】

10月の月例会は「保健師のキャリアと転職」と題し、ハイブリッドで開催。コーディネーターは高家望氏（東急不動産㈱）、原田若奈氏（川崎市立看護大学）、川合瑛絵氏（保健師、都内企業勤務）、白田千佳子氏（㈱エクサ）、の4名が担当した。

最初に、原田氏が「保健師養成教育の変遷とこれから」というテーマで講演を行った。2009年の保助看法改正による保健師の教育期間延長を皮切りに、厚生労働省による卒業時刻達目標の明確化（2010年）、必要単位数や実習内容の拡充、公衆衛生看護学・保健医療福祉行政論の単位増加（2011・2020年）など、保健師教育の変遷を振り返った。さらに、2024年に改定され2026年から運用開始予定の看護学教育モデル・コア・カリキュラムでは、従来のコンテンツ基盤からコンピテンシー基盤への転換が図られ、卒業時に11のコンピテンシー（対象を総合的・全人的に捉える力、プロフェッショナリズム、生涯学習能力、地域社会における健康支援、ケアの質と安全管理、多職種連携力、科学的探究力、患者ケアのための臨床スキル、コミュニケーション力、IT活用能力、専門知識に基づく問題解決力）が求められると紹介した。特にIT活用能力の育成カリキュラムは、高校での「情報」必修化世代に対応した内容であり、今後ITスキルが高い保健師が登場する可能性を示唆した。さらに看護師の知識レベルが保健師に求められる水準に近づいていることに加え、保健師の実践力は現場で継続的に磨く必要があると語った。

また自身のキャリアにも触れ、新卒で保健師として入職した企業はほぼ一人職場であったが、その環境のおかげで産業保健業務の一連の流れを学ぶことができたという。さらに、さんぽ会で大学院に進学する保健師と出会ったことが転機となり、行政保健師として勤務する傍ら博士号を取得し、現在は大学教員として保健師の育成に携わっていると述べた。また、行政保健師の経験が、企業において産休に入る従業員やメンタルヘルス不調による退職者への行政的支援の実現につながったと語った。

続いて登壇した川合氏は、大学時代の講義や実習を通じ産業保健に興味を持ったことや、学生時代からさんぽ会へ参加したことがきっかけとなり、新卒で産業保健師を志したと語り、その際の就職活動について紹介した。新卒の保健師を採用する企業が非常に少ない中、「健康経営」というキーワードで企業を探し、保健師の採用を行っていない企業にも積極的にアプローチするなどの行動を重ねた結果、希望を実現することができたという。入職した化学メーカーでは、他の一般新入社員

とともに半年間の現場実習に入り、この経験により工場で働く労働者の視点や関係づくりを持つことができ、その後の産業保健活動に活かすことができたと述べた。

3番目に登壇した白田氏は、一般企業の会社員からスタートし、看護大学へ編入・卒業後は看護師として勤務し、協会けんぽ・ベンチャー企業、現在はIT企業の保健師として勤務中という自身のキャリアを紹介した。さまざまな業種の企業・団体を経て、一般社員としての目線や看護師としての自身の経験をハラスメント対策などへ活用すること、健保事業の知識が少ない保健師が多い中、協会けんぽで自身の強みを磨くことなど、各所での経験をキャリアへと活かすことができていると語った。

最後に、㈱構造計画研究所HD総務部の酒向雄介氏が、産業保健師を雇用した経緯と成果を紹介した。採用前、同社は予防的健康管理、両立支援、傷病休職者の復職支援、復職後フォローにおいて課題を抱えていた。しかし、保健師の介入により、ストレスチェック実施による長時間労働者の不調の早期発見、疾病をもつ従業員や休職者に対する専門的なサポートと助言、さらに産業医と人事担当者との円滑な連携が実現し、両立支援・復職支援の精度が大きく向上したという。今後は、再発や再休職の防止にも期待していると展望を語った。

ディスカッションでは、卒業後すぐに保健師になるべきか、臨床経験を積んで保健師になるべきかという質問が挙がった。臨床を通じて命の重みを肌で感じた後に保健師になることは深い意味を持つ。一方で、臨床経験を経ず現場で活躍する保健師も少なくない。どちらの道にも価値があり、正解は一つではない。大切なのは、臨床経験を自分のキャリアの中でどう位置づけ、どんな保健師として歩むかを考えることであるというメッセージが送られた。

さらに現状では産業保健師の雇用が法律上必須ではないため、企業における保健師採用のメリットをどう打ち出すべきかという問いも投げかけられた。これに対し、保健師が個別対応にとどまらず、ポピュレーションアプローチや職場環境改善に貢献できること、産業医に話しづらい内容でも保健師には相談しやすいという点などが挙げられた。

白田氏は、保健師として求められる役割を一つひとつ積み重ね、「1日に1つでも役に立つ」ことを意識する重要性を強調した。その積み重ねが評価につながり、保健師の採用拡大に結びつくと述べた。また原田氏は、産業保健師の仕事の醍醐味は、職業人生だけでなく、その人の一生に関わる支援につながる点であるとし、これから産業保健師を目指す人たちに「ぜひこの世界に飛び込んでほしい」とエールを送った。

さんぽ会の詳細は下記サイトをご覧ください。

- ホームページ <https://sanpokai.net>
- FB ページ <http://www.facebook.com/sanpokai>